

東海大学自然史博物館の歩みと標本寄託について

柴 正博

私が勤めていた東海大学海洋学部博物館は、2023年3月に海洋科学博物館と自然史博物館の有料入館を終了し、2026年度には施設のほとんどが解体されることになりました。しかし、幸いにして海洋科学博物館にある体長18mのピグミーシロナガスクジラの骨格標本がふじのくに地球環境史ミュージアム（以後、ふじミュー）に寄託されることになりました。また、自然史博物館の恐竜化石などの大型骨格標本と収蔵標本の多くについてもふじミューに寄託されることが検討されています。

自然史博物館の恐竜化石などの大型標本が寄託されるとすると、おそらくタルボサウルス、トリケラトプス、ステゴサウルス、エウオブロケファルス、プロバクトサウルス、スクトサウルス、ディメトロドン、ケナガマンモスなどがあり、どれも貴重な標本で、ふじミューで保存または展示して静岡県のみなさんに継続して御覧いただければと思います。

そのため、現在、寄託についての話合いや、移設・運搬に関する方法などを、NPO自然ネットも協力してふじミューと東海大学博物館の職員で検討されています。この緊急的移設作業が行われるとすると、それはおそらく今年度中と思われます。それが実施された折には、みなさんにご協力をお願いすることもあると思いますので、よろしくお願いいいたします。ここでは、その予備知識として、東海大学自然史博物館これまでの歩みと展示されていた骨格標本について、簡単に振り返ってみたいと思います。

東海大学自然史博物館の歩みと展示標本

東海大学自然史博物館は、1981年10月27日に恐竜化石骨格の展示を主体とした「恐竜館（自然史博物館）」として開館しました。この博物館の資料のもととなったものは、1973年に東海大学と読売新聞社が共催して開催された「大恐竜展」で展示された、ソビエト（ロシア）科学アカデミーが所蔵する恐竜化石骨格標本でした。この展示会は、静岡市（当時

清水市）三保と東京上野の国立科学博物館で開催され、その時にロシアから実物の恐竜化石を含む多くの化石標本が展示され、その際に日本でそれら化石のいくつかのレプリカ標本が作成され、その一部が東海大学に残されました。

東海大学では、そのレプリカ標本を所有していたことと、展示会を開催した展示館の建物がそのまま残っていたことから、すでに隣接してあった海洋科学博物館や人体科学博物館とともに、当時の「東海大学社会教育センター」の博物館群のひとつとして「恐竜館」が開館されました。

1982年4月から「恐竜館」には、専門学芸員として私が1名雇用され、展示の充実のための活動を始めました。「恐竜館」は、1983年5月1日に隣接する未使用の展示館を「地球館」として整備し、その名称を「東海大学自然史博物館（恐竜館・地球館）」と変えました。1987年1月には貝類の専門家である波部忠重館長により、約800種を展示した「貝の世界」展示室を新設しました。このとき、東海大学自然史博物館の研究・収蔵・展示（教育）のテーマ（コレクションポリシー）は、恐竜など古生物の進化と絶滅なども含めた地球の歴史と、地元である駿河湾周辺地域の地質や海洋生物のこと（もの）になりました。

自然史博物館では、当初からあった「タルボサウルスの全身骨格」、「プロバクトサウルスの全身骨格」、「プロトケラトプスの全身骨格」、「サウロロフスの頭骨」などに、1988年には「恐竜の足跡」、1989年には「ステゴサウルスの全身骨格」、1990年には「アパトサウルスの大腿骨」、1991年には「トリラトプスの頭骨」と「アロサウルスの頭骨」、1992年には「イグアノドンの頭骨」、1993年には「ディプロドクスの全身骨格」が加わり、大型恐竜標本の充実が図られました。

そして、1993年1月にはそれまで使用ていなかつた恐竜館2階も含め、全体を再構



東海大学自然史博物館の恐竜ホールの恐竜骨格。手前からステゴサウルス、ディプロドクス、タルボサウルス、プロバクトサウルス。ディプロドクスは福井県立恐竜博物館に寄託される。



トリケラトプスの全身骨格。この標本はカリフォルニア州立自然史博物館の標本のレプリカ。

成した大改修が行われました。その後、1995年には「トリケラトプスの全身骨格」、1999年には「エウオプロケファルスの全身骨格」を展示し、ここに至り当初から展示されていたものと合わせ、恐竜の大きなグループの代表的な種類が恐竜ホールにすべて勢ぞろいしました。

21世紀を迎える前の2000年10月に東海大学社会教育センターでは、人体科学博物館が閉館し、文化ランドのミニチュアランドが閉園しました。そして、旧人体科学博物館の建物に2002年1月に自然史博物館が移設されました。移設した自然史博物館の新たな展示は、「生物の絶滅と地球環境」というテーマで、恐竜化石の展示を中心に脊椎動物の進化の歴史を過去から現在にたどるストーリーになりました。

エントランスホールからエスカレーターに



ケナガマンモスの全身骨格。展示場の高さ制限があり、狩猟によりヒトに襲われてしりもちをつくポーズで展示されていた。

乗って3階にあがり、脊椎動物が発展した約4億年前の「古生代デボン紀の世界」、「哺乳類型爬虫類」、そして「恐竜ホール」へ進み、2階は「中生代の海」、「生きてる化石」、「哺乳類の時代」、「氷河の世界」などの展示コーナーがありました。「氷河の世界」のコーナーに「ケナガマンモスの全身骨格」が設置されました。1階はディスカバリー室になり、レクチャールームや学習室などがありました。

2013～2014年に、1階を「静岡県の自然」というテーマで展示改修が行なわれ、合わせて展示や入口を含めた動線の不備、館全体の床や展示壁などが修復されました。「静岡県の自然」は、展示場としては狭いですが、「富士山のすがた」や「南アルプスの自然」、「里山の自然」など、静岡県の特徴的な自然についてコンパクトに統一的なデザインで展示されました。展示物には、自分で製作した「富士山のすがた」のプロジェクトショニマッピング立体地形模型や「雑木林」のジオラマなどがありました。

自然史博物館の展示標本には、古生代末期のいわゆる「哺乳類型爬虫類」といわれる「スクロサウルス」や「ディメトロドン」などの全身骨格がある点も特徴的で、古生代以降の代表的な化石標本や静岡県とその周辺の新生代貝化石標本なども多くあります。恐竜化石とともに、これらの標本がふじミューに寄託され、展示および教育などで有効に活用されれば、ふじミューの活動はさらに広がると思います。